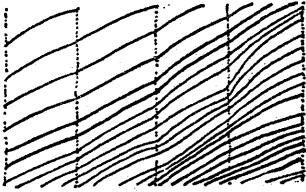


エリクソンと幼児教育 (19)



仁科 弥生

エリクソンの子ども観について

「私たちの子どもたちの子どもへ」捧げられた『幼児期と社会』（一九五〇年）は、「児童期を不合理な恐怖をつくり出す兵器工場として利用し続けていてよいものか、それとも、大人と子どもの関係を、他の同じように不平等な関係と共に、もっと合理的な秩序の中の仲間同士の関係の位置にまで高めるべきか、われわれはその決断を迫られている。」というその第一章の結びの言葉にうかがわれるように、エリクソンが大きな危機感のもとに現代の幼児童期のあり方をあらためて問直した書でもあった。

そこで、今回と次回にわたって、エリクソンの子ども観について考察して、「エリクソンと幼児教育」の拙稿を結びたいと思う。

まずエリクソンはその初版のまえがきで次のように述べている。「これは幼児期に関する書でもある。歴史、社会、道徳に関するいろいろな書物を読んでみて、人

間は誰でもまず子どもとして出発し、世界中の民族はすべて子ども部屋から始まるという事実に言及しているものはきわめて少い。これは幼児期に関するわれわれの意識の問題にあることの指摘である。そして彼が、同一性の強化を遅らせる文化的障害として、文明の拡大傾向とその階層化と専門化とが進むにつれて、幼児童期が、人の一生の中の一つの切り離された区分となり、その区分固有の伝説や文学をもつようになった現状をあげたことについては、前回ですでに触れた通りである。つまり、子どもが自我の統合において、彼らの存在に関連する社会の区分以外を包含することがきわめて困難になったということが、彼らの同一性の形成をむつかしくする一因である、と彼は批判したのである。

ところで、この幼児童期について、フィリップ・アリエスが『〈子供〉の誕生』（一九六〇年）の中で、「子ども」「子ども期」という観念の歴史的発展をあとづけしている。ちなみに、アリエスによれば、中世の生活は「事実と殆どいかなるプライバシーも存在せず、四六時中來

客の無遠慮にさらされている家の中で、主人も奉公人も、子どもも大人も、混って暮らしていた」という。そのような社会的に濃密な共同の生活には、家族そのものが意識や価値としては存在していなかったのである。その後、ようやく十五世紀から十八世紀にかけて家族意識が発生したが、それもはじめは貴族やブルジョア、職人や商人の名士たちという階層に限定されていた。家族意識がやがてあらゆる身分に拡まり、それに伴って子どもが匿名の状態から抜け出したのは十八世紀以後のことであつたという彼の発見はわれわれの注意をひく。

つまり、中世においては、「子ども」ははっきりと表象されておらず、子ども期に相当する期間は「小さな大人」がひとりで自分の用を足すにはいたらぬ期間に切りつめられていたのである。そして、子どもは七歳位になるとすぐに大人たちと一緒にされ、毎日の仕事や遊びを共有していたという。

また中世文明は教育という観念をもたないでいたことが明らかにされている。子どもたちは両親から引き離さ

れ、他の子どもや大人たちと混在する徒弟修業に出され、そこで大人たちの仕事を手伝いながら、知るべきことを学んでいたのである。教育的配慮が出現したのは近世に入ってからである。といっても、たとえば人文主義者たちは人間の教養ということを重視するにとどまっています、子どもたちだけを対象とする教育には殆ど関心を示さなかった。その中で、人文主義者であるよりはモラリストであった宗教改革の支持者たちが、中世社会の無規律状態とたたかい、また道徳秩序の擁護者たちが教育の重要性を説くようになったという。こうして、教育が大人に対してではなく、本質的に子どもと青年に対してなされるようになったのである。そして、子どもは人生に入っていくにはまだ十分成熟していないことや、子どもを大人と一緒に混交するに先立って、その準備をさせるために、隔離された、ある特殊な制度のもとに置く必要があることなどが認められるようになった。この準備を、徒弟修業に代って子どもに保障するために出現したのが学校であった。

このように、アリエスは、家庭と学校とが一緒になって、大人たちの世界から子どもを引きあげさせた過程を描き出し、さらに、かつては自由放任であった学校が子どもたちをしっかりと厳格になっていく規律の体制に閉じこめていった歴史を明らかにした。そして彼は「最小の空間の中に諸々の生活様式を最大限に集中させ、全くかけ離れて身分のちがう人々をバロック的に近づけていた古い社会とは反対の社会では、居住空間や市街の再編成と、閉鎖的な近代大家族によって、穏和な仕方だが、権力の関係によって枠組がつけられ、管理化がおしすすめられている。」と問題提起を行ったのである。してみると、大人から切り離された長い幼児童期を大人と子どもの不平等な関係としてとらえ、そこに生じる子どもの恐怖の研究に乗り出したエリクソンは、まさにその囲い込まれた者の心理に研究と思惟を進めようとしたということになる。

さて、エリクソンの自我発達理論の一つの特徴は、自我機能と社会的現実と生物学的存在という三者が相互性

という概念で統合されているところにある。すなわち、発達していく個人とその社会的環境（母親）との間の調整が自我のはたらしきによって相互補完的に行われろと想定されている。エリクソンの子ども観はその相互性の概念の中にもっともよく表現されていると思われる。

そこで、まず相互性の概念について述べなければならぬ。エリクソンは、新生児はたしかに物理的環境を支配する何物をももってはいないが、そのもろさ、その弱さ自体が大人の注意を引き、家族を支配し、家族を動かすという事実注目する。つまり新生児の弱々しさが見守る母親の関心をさそい、そして世話をさせることによって、さらに母親の養育熱をおおるといふ。このように母子関係は最初期から相互交渉的であって、どのような反応形式が生物学的に与えられていようと、それらは一連の変化する相互調節の形式の可能性である、とエリクソンは考える。しかも、それは単に身体的反応の相互調節の問題でとどまるものではなく、乳児は母親との相互調整の経験から発達課題である基本的な信頼関係を学ぶ

ことになる、と加えている。

ところで、エリクソンが人間の全生涯を統合性をもった心理社会的現象としてとらえ、それを八つの発達段階に分けて、その各段階に発達課題を仮定したことについてはすでに触れた。われわれは成年期の発達課題を彼がどのように考えているのかをみてみなければならぬだろう。

成年期において、人は社会の中で自分の占める場所を固めはじめ、それぞれの場でさまざまな業績をあげることに熱心になる。エリクソンはこの段階の課題を *generativity* 生殖性と呼んでいる。これは彼の造語と考えられている。フロイトの *genitality* 性器的成熟の概念をこえて、この生殖性の概念は、次の世代を生み、これを導くための配慮をはじめ、生産や創造など人間の生み出すものすべてを包含する。そして生殖性の反対の極は停滞であると思定されている。人は生み出したものを育み、時には苦勞し、そのことがまたはりあいとなって、豊かに成熟する。これがうまく果されないと、沈滞感、

倦怠感、対人関係の貧困化、自己への没入などが生じるというのである。そして世話をこの時期の徳目としてエリックソンが考えたことにここで特に注目したい。つまり、自分の生み出したものに対して、責任をもって世話をすることがあげられているのである。彼によれば、親であるということは大部分の人にとってはもっとも重要な生産的経験であるが、たとえ子どもを生まなくても、他人の子どもの世話や、子どもたちのためのよりよい社会の建設に参加することによっても生産的たりうるという。勿論、子どもを生み育てながら、文化的創造を行うこともできるし、また人類の存続は多くの労働者や芸術家や思想家の生産性にも依存していることはいうまでもない。したがって生み出されたものすべてに対する広がる関心であり、それを育て、守ることを意味していることがわかる。

そして世話することに伴う両面価値感情にまで洞察を深めて、エリックソンは、人間は他人から求められることを願う要求をもっていると想定する。このことについて

彼は次のように述べている。「子どもたちの大人への依存を芝居がかりに表現したがる当世風の主張のために、しばしばわれわれは年取った世代が若い世代に依存している事実を見落しがちである。成熟した人間は必要とされることを必要とする。成熟は、生み出され、世話を必要とするものから激励は勿論、導きをも必要としているのである。」(『幼児期と社会』)つまり、われわれは他人から必要とされることを求めるので、自分の生み出したもの、育てねばならないものを守り、世話をし、そしてやがて自分を乗り越えるものからの厳しい働きかけをも必要とするというのである。すなわちわれわれの世話も相互補完的であるにとらえられているのである。そして、さらに次のように説明する。「人間が、心理社会的に生きていけるのは、この基本的な徳目によって守られており、この徳目が、歴史的につながりかさなり合っている世代の相互交渉の中で発達し、体制化されていく状況の中で、われわれが共に生きていくからである。ここで共に生きる、というのは、単なる偶然のつながりという

意味ではない。個人の人生におけるいくつかの段階は、他者の段階とかさなり合いながら生きつづけ、一方が動く、他方も動く歯車のように噛み合いながらすすみいくものである。」(『洞察と責任』) 言いかえると、一人の個人の発達段階は、かかわりあう他者の発達段階と対応して、人間は相互に生きているのである。無力な子どもは自分の欲求を満たすために母親の援助を求める。これに対して母親は、自分の発達課題を全うするために生殖性の一つの課題として子どもの世話をするという。そこには、成年期と幼児期が接し、かつ互いに調整し合うという考え方が提示されている。そして親と子は根本的に協調関係の上に成り立っており、その育て合う関係は全く互角であるという相互性が強調されている。この相互性が確立されたとき、子どもは健康な子どもとなり、母親は健全な母親となつて、両者はともに自分の発達課題を遂行したことになるのである。したがって、母親であろうと、子どもであろうと、互いに自分の発達課題に取り組んでいるという意味で、両者は対等であり、その関

係はけつして強者と弱者、搾取者と被搾取者の関係であつてはならない、とエリクソンは主張する。そこに、子どもを対等の他者とみるエリクソンの子ども観が面目躍如として打ち出されている。

そしてまた、育児やしつけのためだけの問題としてではなく、大人も自分の発達の課題として受け止めるべきであるとするエリクソンの考え方は傾聴に価すると思われる。なぜなら、世代や社会と人間の本性とのかかわりについてのこの思想は、とくに、出産や育児の負担を女性個人の同一性の確立を困難にするものと受け止めて、生きがい感の喪失に悩む人々にとつて、一つの大きな発達の転換性を示唆してくれているからである。

ところで、エリクソンのこのような子ども観は精神分析医としての臨床経験から、とくに神経的不安の研究から生まれたのである。

まず彼は比較的考察から次の点を指摘する。すなわち、子ども時代が長いのは人間の特色である。部族や国家は集団独自の大人の同一性、つまり彼ら独特の人格的

統合を個人が獲得するように、いろいろな直観的な方法で子どものしつけを利用してきた。しかし、彼らがそれぞれ特色のある方法で利用した幼児期のその状態の中から実は不合理な恐怖が生れ、それによって大人たちは悩まされ、また悩みつつづけている。なぜなら、長い幼児期はしばしば残酷にも子どもの依存性を搾取する誘惑に大人をさそい、一方、子どもは大きな不安といつまでも続く不安定感にさらされることになるからである。

次に、恐怖と不安の違いについて一寸触れておこう。恐怖は認識しうる危険に対して、それを分別をもって判断したり、現実的に対処したりできるような懸念の精神状態である。一方、不安は、緊張が拡散している精神状態で、外界の危険を拡大してみせたり、ありもしない危険の幻想を抱かせたりする。しかも、それは危険を防いだり支配したりするための適切な方法を指示することはないとされている。

子どもの場合、恐怖と不安の違いは大人のそのようにはっきりしたものではない。なぜなら、身体的、知的

機能が未熟なために、内面的危険、現実の危険と想像上の危険とを区別することができないからである。勿論、子どもはそれを学ばねばならない。しかしその場合、安心を与えられるような大人の導きに助けられて一步一步判断力と統御力を発達させることが大切であるという。なぜなら、子どもは、大人の理屈を納得できなかった場合や、或は大人の隠された恐怖やとまどいに気づいた場合、つかみどころのない破壊のパンニック感におそわれるからである。そして子どもらしい非合理的な恐怖を抱きやすくなり、また恐怖の中で不安をつのらせることになる。エリクソンは、このような幼児期の恐怖が大人の抱く多くの非合理的な不安の先駆をなすとしてそれらに注目したのである。

しかも、大人からの統制は、その時の子どもの自己抑制の能力に見合わないことが多いために、子どもに避けがたい負担を課すことになり、それは子どもの心に怒りと不安の悪循環を引き起こす。エリクソンは、それが、過度に強制されたり、操られたりすることに対する不寛

容性としていつまでもわれわれの心に残ることになると分析している。

また、大人の判断力がしばしば幼児期に経験した緊張と怒りによって損われることがあるのは、合理的な大人の恐怖と、それに関連した幼児期の不安との間に短絡が生じて非合理的な緊張状態が引き起こされるためであると説明する。そして、われわれは不安以外に恐れるものは何もないといわれる所以も、実はそこにある、とエリクソンはみる。われわれと非合理的な行動や非合理的な思考の飛躍に、或は非合理的にも危険の否認にまで駆り立てるのは、連想によって生じた漫然とした不安の状態に対する恐怖であって、危険に対する恐怖ではないからである。このような不安で脅やかされると、われわれは恐れる理由のない危険を拡大視したり、逆に恐れなければならぬ危険を無視したりするのである。それゆえ、不安に屈することなく恐怖を意識できること、つまり不安に直面しても、恐れなければならぬものを正確に判断しうるものが、思慮分別のある精神構造にとってきわ

めて重要な条件となる。エリクソンは、それには、まずわれわれが人生の第一の不平等は子どもと大人の関係であることに気づき、それを対等の育て合う関係としてとらえ直すこと、幼児期のしつけによって損われてしまいがちな正確に恐れ、賢明に協力するという能力を取りもどすことが先決であると考え。そして、そのためには、われわれの不安の幼児期の起源にまでわれわれの認識を広げる必要があるとして、恐怖の解説を試みていく。その詳細については次回にゆずらう。

参考文献

Ariès, P., 『子供』の誕生』杉山他訳

みすず書房 一九八〇

Erikson, E. H., 『幼児期と社会』前掲書

『洞察と責任』前掲書